

2023年6月22日、オンライン形式（Zoomによる視聴）にて名古屋市SDGs推進プラットフォームの第1回セミナーが開催されました。3つの会員様にご協力いただき、先進的な取り組みを発表していただき、プラットフォーム会員の45名に参加（視聴）していただきました。

一般社団法人SDGsヒーローズ 代表理事 井上 麻里子氏 『Vtuberと学ぼう！～SDGs169のターゲット～』

一般社団法人SDGsヒーローズは、普段はYouTubeで企業のSDGsの取組発信を行ったり、愛知県警察や万博協会とも連携しながら、SDGsの普及や自分ごと化をしていただくための活動を行っている。中でも、以下の3つのポイントを大切に組み合わせて行っている。「誰一人取り残さない」「自分ごと化」「SDGsウォッシュをなくす」特に「SDGsウォッシュ」に関しては、SDGsをやってるフリと言い換えることができ、これを無くすことを目標に日々活動を行っている。



Vtuber きらめき ひいろ



一般社団法人SDGsヒーローズ 代表理事 井上 麻里子氏

■ SDGsの基本理解

SDGsとは、2015年の国連サミットで193カ国の国連加盟国が全会一致で採択されたものだが、その前身となっていた「MDGs」を知っている人はそれほど多くない。SDGsは2015年～2030年であることに対し、MDGsは2001年～2015年が目標年となっている。

実は、この両者は取組主体に大きな違いがあり、MDGsは国連や政府が取組むものとされ、発展途上国の課題を解決することを目的にされていた。そこから発展したSDGsは、国や自治体、民間企業、個人が主体となり、発展途上国だけではなく先進国の課題も解決することが目的とされている。

MDGsの成果としては「開発途上国で極度の貧困で暮らす人々の割合」や「初等教育就学率」「HIVへの新たな感染者」などにおいて改善が見られ、多くの命を救う成果がたくさんあった。一方で、「女性の地位」「二酸化炭素の排出量など、いくつかの課題も残った。

■ SDGsのゴールとターゲット

SDGsのターゲットとは、ゴールを達成するために必要な具体的目標と言われ、232の指標は各ターゲットの達成の進捗を量るためのもの。

[生活に身近なターゲット例]

- 3-5 : 薬物やアルコールの過剰摂取からみんなを守ろう
- 3-6 : 交通事故による死傷者を今の半分にしよう
- 3-A : すべての人をたばこの害から守る約束を確実に実行しよう
- 5-4 : 育児や家事を労働とみなして社会全体で分担しよう
- 12-3 : 一人あたりの食品廃棄量を半分に減らそう
- 12-5 : 廃棄物の発生を3Rで大幅に減らそう
- 17-16 : 多種多様なパートナーシップでSDGsを達成しよう

このあたりは今日からでも始められそうな生活に身近なターゲット。

それに対し、個人で取組むには難しそうなターゲットもある。

「150円以下で生活する人をゼロにする」「紛争を無くす」「経済成長のキープ」など、個人で今からすぐにはできるかというところでないターゲットもある。だからといって、本当に何もできないのか？



例えばターゲット1-1「150円以下で生活する人をゼロにしよう」というターゲットには、関連するターゲットがいくつか見られる。十分な職業スキルをみんなに分け与えることでターゲット1-1の達成にもつながるなど、ターゲットすべてが独立しているわけではなく、すべてがつながりあってできている。自分には関係ないと思うようなターゲットでも実はつながりがあることを意識することが大切。例えば、「正しい知識を持つ」「支援団体への寄付」「フェアトレード商品を選んで購入する」ことなど、今日からでもできることがある。

■ 2025年大阪・関西万博について

2025年4月から10月まで大阪の夢洲で万博が開催されるが、これはSDGsの達成に向けた世界のこれまでの進捗状況を確認し、その達成に向けた取組を加速させる絶好の機会になるといわれている。

ここで世界のSDGsランキングを見てみたいが、日本は2021年が18位、2022年に19位となっており、どんどんランクを落としている。日本の目標別達成度推移を見てみると、日本は得意な目標と苦手な目標があることがわかる。

このなかで、主要な課題が残っている目標としては「気候変動に具体的な対策を」であるが、2015年のパリ協定において定められた目標（世界の平均気温の上昇を1.5℃に抑える）に対し、日本の平均気温は100年あたり1.26℃上昇している。（世界の平均は0.79℃）

その代償として、森林面積の減少や、大気汚染、水質汚染、海洋汚染、絶滅危惧、砂漠化、放射線廃棄物もすでに国内に1.9万tも存在している。これらを一人ひとりが行動を起こすことによって改善していかなくてはいけない

良い取り組みも失敗した取り組みも世界中で情報を共有しあって一人ひとりが主人公になり、誰一人取り残すことのない世界にしていきたいと思って活動していくことが大切である。

名古屋国際中学校・高等学校は、私立の中高一貫校で関連校に名古屋商科大学がある。校内のアトリウムにSDGsの目標や生徒がやるべきことを展示したり、研究発表のポスター掲示などを行っている。特色としては、「国際バカロレア」という英語教育を推進している学校であり、企業やNPO、国内外の学校と連携して新しい学びを構築していく「WWL採択校」でもある。また、「ユネスコスクール」に指定されている学校でもある。最近のSDGsに関わる賞として、愛知県の愛知環境賞（優秀賞）やESD大賞（ベスト・アクティビティ賞）を受賞した。



名古屋国際中学校・高等学校 黒宮 祥男氏

■SDGsと学校（事例紹介）

【八事興正寺講演の里山保全活動】

八事興正寺の里山づくりの会がこれまで間伐作業を行い森の維持をしていたが、高齢化による後継者不足という課題があり、生徒を活動に参加させているほか、興正寺のお祭り参画を通したまちづくりにも貢献している。

【障がい者スポーツイベント協同開催】

昭和区役所と鶴舞公園のテラスポで、障がい者と一緒にスポーツを楽しむイベントにボランティアとして参加。

【SDGs啓発玩具の開発】

2015年にSDGsが発表されてから、学内にSDGsに関するSusteen!という部活動が発足した。当時、SDGsがそれほど広まっていなかったため、「SDGsガチャ」を手づくりで開発し、様々なイベントで出展してきた。これは「アンケート型ガチャ」となっており、17のゴールのうち押されたボタンで集計を行い、どの世代がどのゴールに興味を持ちたり取り組みを行っているかなどを分析し発表している。※もし「SDGsガチャ」出展を希望される場合は、生徒ともども無料でご協力します。

【世界遺産保全活動の体験（カンボジア）】

日本政府とカンボジア政府が行っている、カンボジアのアンコールワットで行われている世界遺産の保全活動に参加している。遺跡の掃除をしたり、接着剤で石を固定するなど、世界遺産を保全する活動を行っている。

【商品開発】

桂新堂と若鯨家と本校で「サステナブルせんべい」を共同開発した。食品加工残渣となり大量に廃棄されるえびの頭や、うどんの切れ端を再利用したものがこのせんべい。このサステナブルえびせんべいをどうやって啓発していこうか、と悩んだ両社から相談を受け、生徒がネーミングやパッケージなどのアイデアを出して商品化が進んだ。

【企業・NPO・他校で新しい学びを議論】

生徒がメタバースを開発し、メタバース上で多くの企業や遠方の学校の生徒と面談し、社会課題解決に向けて議論の場を設けている。

■なぜSDGs17にパートナーシップがあるのか

本校がSDGsの活動を行っていく中で、パートナーシップの重要性を実感している。例：サステナブルえびせんべい

- ① 桂新堂・松坂屋でアイデアが生まれた
- ② そこに生徒が参画し、商品が誕生した
- ③ 松坂屋で販売していただけることに
- ④ 売上の一部を愛知県に寄付することに
- ⑤ 愛知県からなごや環境大学へ売上を寄付
- ⑥ 系列の名古屋商科大学が日進市とコラボしてイベント出展・啓発活動に活用

それぞれが持っているネットワークを駆使すると数珠つなぎで広がっていく。それぞれの主体を星と捉えるなら、それらをつないで星座をつくっていくことがパートナーシップのよい事例となる。バラバラにやるよりも様々な主体でパートナーシップを組むことで、新しい価値や見方の創出につながる。



② なぜ、SDGs17にパートナーシップがあるのか？

■SDGs達成に向けた学校の役割とは？

文科省の方針により、学校ではSDGsを学ばなければいけないが、あくまで学校は人を育てる場。本校の場合は、「すべてに思いやりを持った生徒」を育てると考えている。学び方も多様化が必要で、学校で先生や教科書を相手に学ぶだけでなく、学校を飛び出して、先生以外の様々な大人から学ぶことがこれからは必要。さらに、得た知識でどんどん挑戦をする場をつくることで、SDGsの解決につながると考えている。

■今後の展望

SDGsのスキル・知識を持った人材がこれから3年後くらいに社会に出てくる。また、スタートアップ精神やアントレプレナー精神を持った人材が出てくる。つまり、国内外の多様なパートナーシップを構築しながら挑戦の場を好む若者が増えるということである。こういった学生が社会に出るといことを念頭において、また、名古屋市SDGs推進プラットフォームなどを通して会社やNPOの中でパートナーシップを意識していただければ、これからの若者はどんどん参加してくれると考えている。

■質問

SDGsガチャを貸し出してもらう時、平日や休日など生徒さんが動きやすいのはどちらですか？

■回答

校長先生が生徒の活動に非常に理解があり、平日でも公欠を取って参画することもできます。また、ガチャの中に入れてほしいものがあれば対応します。その他、企業からのコラボ案件も非常に多く頂いているので、お気軽にお声がけください。

社内外でSDGs普及啓発に取り組む「SDGsキーパーソン」として活動している。

リコージャパンは東京に本社のある全国広域の企業ではあるが、日本全国に拠点があり、各地で地域連携を積極的に行っている企業でもある。

弊社では、経営理念・事業戦略・ステークホルダーからの期待を考慮し、貢献する12のゴールを抽出し、7つの重要社会課題を設定している。そのうえで、事業を通じた社会課題解決と経営基盤の強化という2軸で取り組みを推進している。



リコージャパン株式会社 愛知支社 阿部 美奈氏

また、「SDGsと事業の同軸化」を掲げており、業績と社会課題の解決を連動させることを重視している。例えば、「脱炭素社会の実現」に関しては、複合機の組立工程で100%再生可能エネルギーを使用したり、再生プラスチックの割合を増やしていくなどの製品づくりを進めているため、弊社の製品をお使いいただくことで、脱炭素社会に一歩近づけるかたちになっている。

その他、マングローブの植林活動にも参加しており、インドネシア・フィリピンで活動をしている。複合機の販売1台ごとに1本のマングローブを植林しており、製造過程でのCO2削減に取り組みつつも、さらにマングローブを植林することで、CO2削減を加速させている。

■ 植林活動は6つのSDGsゴールにつながる

植林は環境に関するゴールに直結するイメージだが、実はマングローブはもっと多くのゴールに貢献することができる。

- ・ 根っこには非常に多くの生物が住み着くため、土地が非常に豊かになる
- ・ 大地にしっかりと根を下ろすため、海外線に自然の防波堤をつくることになる
- ・ 豊かになった土地で地域の人々の暮らしも豊かになっていく
- ・ 海水と淡水も混ざり合う場所に生息するため、他の植物と競合することが少なく、生態系を保全できる。

このように事業を行うことで、どう社会課題解決につながっているかを広い視野を持って考えることが大切。

■ 社会貢献活動について

事業とSDGsの同軸化とは別に、社会貢献活動も行っている。社員が全員参加する他、地域の拠点それぞれで地域貢献活動を行っている。社内では、寄付つき自動販売機やフードドライブ活動、ハブラシリサイクルプログラムなどを実施している。その他、障がい者の皆様の自立と社会参加支援の活動を進めており、社会福祉法人日本介助犬協会を応援し、介助犬の訓練の場として社内を提供している。

■ 社内浸透について

- 2016年、「SDGsとは」という勉強会を全国拠点で開催。
- 2017年、マテリアリティを発表し、経営トップがコミットメント。
- 2018年、SDGs強化月間を設定したり、取り組みの自分ごと化を推進。社内外でSDGsを推進するSDGsキーパーソンが誕生。当初は10数名だったが、今では感度の高い若い世代からの立候補者が多く、今年500名を超えるメンバーがいる。
- 2020年、マングローブ植林活動をスタート
- 2021年、さらに細かい活動として具体的な目標設定を行い、PDCAを回している。

このような道のりを辿ってきたこともあり、社内の9割はSDGsを理解し、具体的な取り組みも実践している。だが、まだまだこれからの部分もあり、2030年に向けて推進をしていきたいので、具体的な協力や連携などを、プラットフォーム内で実現していきたい。



■ 質問
社員の皆様が意識を高く持って取り組みをされているようですが、支援制度や社内表彰制度はありますか？

■ 回答
社内で表彰する制度 (RJ AWARD) があり、全国での表彰や愛知支社での表彰などがある。称賛してもらえることで、やってきてよかった、評価してもらえた！というモチベーションアップにつながり、次は何をしようかな？という新しいアイデアが生まれ、発信が生まれる。このような好循環を生み出すために、社内では「称賛文化」は非常に大切にしている。

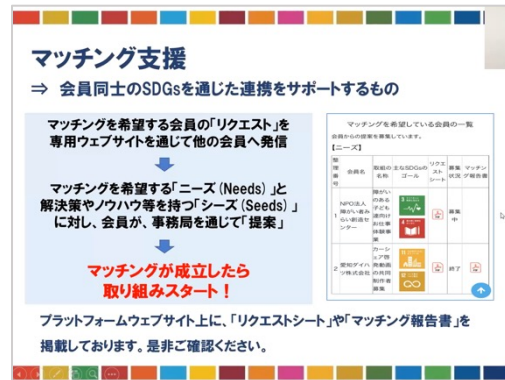
最後に名古屋市からのお知らせとして、SDGs推進プラットフォームの制度として2点ご紹介する。

■「マッチング制度」について

本プラットフォームでは、昨年度の8月から新たにマッチング支援の取り組みを実施している。
マッチング支援とは、会員同士のSDGsを通じた連携をサポートする制度。

手順としては、マッチングを希望する下院様から専用Webサイトにリクエストシートを掲載していただく。
リクエストには2種類あり、「こういう取り組みを行いたいが、自分たちでは難しいので一緒にやりませんか?」と協力を求めるニーズ型。「当団体にはこんな強みやノウハウがありますので、それを活用して取り組みをやりませんか」というシーズ型がある。

それぞれマッチングを希望する会員様を募集し、マッチングが成立したら取り組みを行っていただく。
すでにいくつか事例もあり、プラットフォームWebサイトに、マッチングを希望する会員様のリクエストシートと連携の状況や成果が記載されている「マッチング報告書」も掲載しているので、ぜひご確認いただき、積極的な活用をお願いしたい。



■「分科会」について

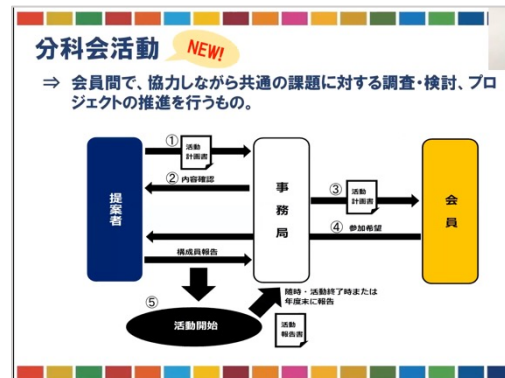
分科会とは、プラットフォームの会員様や名古屋市が他の会員様と連携して取り組みたい活動を提案し、賛同していただける会員様と、それぞれの知見を持ち寄り、課題の解決やプロジェクトの推進を行うというもの。

これは、昨年度実施した会員様へのニーズ調査において、分野を絞って議論したいという声があったため、取り組みの具体化に向けて活動ができる仕組みとなっている。

[分科会活動の流れ]

- ・分科会を立ち上げたい会員様は、活動計画書に記入し事務局に提出。
- ・事務局は内容を確認し、問題なければ、分科会の設置を許可する。
- ・その後事務局から分科会の情報をWebサイトに掲載、すべての会員様へメール案内を行う。
- ・分科会参加希望の会員様は、提案社の連絡先に直接お申し込みをいただき、参加者が集まった段階で、原則提案社が分科会長となり、分科会を招集し活動実施をしていただく。
- ・活動実施後は事務局へ活動報告書を提出していただく。

分科会のテーマの例として、フードロス削減や脱炭素など、色々あると思うが、何でも構わないのでどんどん活用してほしい。



[名古屋市総務局アジア・アジアパラ競技大会推進室による分科会テーマ]

第20回アジア競技大会・第5回アジアパラ競技大会の認知度向上・機運醸成の方法を検討する分科会を立ち上げたい。
本大会が抱える課題として、認知度が低いことや市民の機運醸成ができていない。

東京オリパラでは小型家電からメダルを作ったり、使い捨てプラから消臭剤を作ったり、市民が参加して機運を醸成していた。
愛知・名古屋で行われる本大会でも市民参加型の取り組みをしていくことで機運醸成をしていきたいと考えている。
内容は、環境に関することや国際交流、障がい者支援など何でも受け付けるので、会員の皆様と一緒に機運情勢を図りたい。

